

平成 30 年 4 月 29 日実施

「国家総合職（人間科学）」

心理学分野

【解答/解説】

平成 30 年度人間科学専門択一解説（心理のみ、ただし心理統計以外）

必須問題

No. 1 対人魅力に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答：3

解説： 基本的な社会心理学の知識についての問題。

1. 誤り。入居 6 か月後にソシオメトリックテストを行ったところ、アパートでも一戸建てでも、住宅間の距離が近い人ほど親しくなる確率が高いことが実証された。
2. 誤り。男性でも、女性でも、自分の身体的魅力に関係なく、身体的魅力の高い異性ほど魅力的であると評価した。
3. 正しい。ちなみに、単純接触効果は、あらかじめ好意や嫌悪のない、中性的な刺激に対する効果である。また閾下でも生じる。
4. 誤り。ロミオとジュリエット効果と呼ばれる Driscoll らの実験では、親の反対が強いほど、2 人の恋愛感情が強いことが見出された。
5. 誤り。二文目の結果の解釈が誤っている。正しくは、吊り橋上での恐怖によって生じた生理的喚起(心拍数の上昇など)を、目の前の女性の魅力に誤って帰属させた(誤帰属)ことによって、その女性への好意が高まった(電話連絡をした)と解釈した。

心理系

No.6 次の記述のうち、A～E に当てはまるものの組合せとして最も妥当なのはどれか。ただし、解答に使用する語句は、必要に応じて最初の文字が大文字になるものとする。

正答：2

解説： 人の視覚系の空間周波数特性を調べるために用いられる手法の一つである、選択的順応(selective adaptation)とそのメカニズムに関する問題。専門性が高く、選択肢の語句も巧妙なので、正しい知識がないと正答は困難である。

該当箇所の近辺のみ、部分的に訳す。

- ・これらのニューロンの発火(活動電位の発生)と知覚との間のリンクを確立する一つの方法は、選択的(A)順応(B)という心理物理学的手続きを用いることである。
- ・選択的(A)順応(B)の背後にある考えは、ニューロンが十分に長く発火するならば、やがてニューロンは疲労するということである。
- ・この順応は、二つの生理的効果を引き起こす。(1)ニューロンの活動電位の発生比率は減少し(C)、(2)その刺激が再びすぐに提示されても、ニューロンの活動電位の発生はより少なく(D)なる。
- ・心理物理的な選択的(A)順応(B)の実験の基本的な仮定は、これらの疲労したニューロンが知覚と関係があるならば、垂直方向に反応するニューロンの順応(B)は、垂直に対して選択的に(E)少なく(D)なり、その他の方向には無関係という知覚的效果となるということである。

No. 7 眼球運動に関する記述として妥当なのはどれか。

正答： 4

解説： 眼球運動についてある程度学んだことがあれば容易に解ける標準的な問題である。眼球運動がテーマとなる出題は平成 21 年以來の 9 年ぶり。出題頻度は低いが、問われる内容はあまり変わらないため、関連知識を理解しておけば、今後出題されたときに得点源にできる。

1. 誤り。視運動性眼振とは、不随意眼球運動の一つである。「動いている対象を視野中心で捉え続ける」ような

随意的なものではない。

2. 誤り。読書の際にもサッカードが生じる。ちなみに、眼球が停止している状態については、凝視、固視、注視、眼球停留などさまざまが用語が用いられるので要注意。
3. 誤り。二文目、「それに伴って網膜像が同じ方向に高速に動く」が間違い。正しくは「逆方向に」である。
4. 正しい。ちなみに固視(注視、眼球停留)の際にも、眼球は常に細かく動いており、これを固視微動という。これによって、網膜像の消失(静止網膜像において観察される現象)を防いでいる。
5. 誤り。静止網膜像についての「通常よりもコントラストが高くはっきりした像が観察できる」が誤り。網膜像が微動していない状態では、視対象をはっきりと捉え続けることは困難になる。

No.8 次の記述の内、A～D に当てはまるものの組合せとして最も妥当なのはどれか。ただし、解答に使用する語句は、必要に応じて最初の文字が大文字になるものとする。

正答： 2

解説： ゲシュタルト心理学の思想についての問題。英語も平易で内容も容易である。ざっと訳すと以下の通り。

「1912年に、ワトソンの心理学は、ヴント(A)とティチナー、そして機能主義への攻撃を開始した。ソーンダイクとパブロフの実験室の動物研究は重要なインパクトを及ぼした。ジグムント・フロイトの精神分析はすでに一昔前のものだった。

ゲシュタルト(B)心理学と行動主義(C)心理学との違いはすぐにはっきりとした。ゲシュタルト(B)心理学者は、意識についてそれを原子や要素に還元するという試みを批判しながらも、意識の価値は認めていた。行動主義(C)心理学者は、科学としての心理学にとって意識という概念の有用性を認めなかった。

ゲシュタルト(B)心理学者は、ヴント(A)のアプローチを「れんがとモルタル」の心理学と呼んだが、これは、要素どうし(れんが)を連合過程というモルタルでくっつけたものだという意味である。窓の外を見れば木々と空が実際に見えるが、それは木々と空の知覚の構成要素である明度や色相のような感覚の要素を見るわけではないということを彼らは議論した。

さらに、ゲシュタルト(B)心理学者は、ヴントが、事物の知覚は、要素を寄せ集めてある種の束にしたものだとして主張したと非難した。彼らは、感覚要素が結びつくときに、要素は新たなパターンや形態を形成すると主張した。たとえば、一連の音を集めると、それらの結合からメロディーが生み出されるが、それはももとの個々の音のいずれにも含まれない新たなものである。この考えを一般的に、次のように言う：「全体は部分の寄せ集めとは異なる(D)」。

No.9 視覚系に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 5

解説： 選択肢に出てくる専門用語のせいで、一見難しい問題に見えるが、水晶体や瞳孔の特性や機能を理解していれば、正答を選ぶのはたやすい。

1. 誤り。三文目、桿体について「分光感度の異なる3種類の細胞によって光を受容する」が間違っている。これは正しくは錐体の働きである。
2. 誤り。視力の定義の「屈折異常の程度を見分けることができる」が間違っている。視力はいわゆる解像度のことであり、実用上は「最小分離閾を基本概念とし、最小可読閾(最小認識閾)を用いても差し支えない」ものである(松田, 1995)。視力測定はランドルト環が基準(標準視標)であるが、副尺刺激も用いられる。
3. 誤り。腹側視覚経路と背側視覚経路が逆である。また、「脳における情報処理においては機能が局在している」とあるがこれもおかしい。このような視覚の処理は、他の神経領域も動員して分散して行われていると考えられており、機能が局在しているとはいえない。
4. 誤り。二文目が間違っている。盲視(blindsight)とは正しくは、第一次視覚野に損傷を持つ人に起こる、特殊な

視覚機能のことである。つまり、視野内の視覚欠損部分に光点を提示されても何も見えない。しかし、この見えない領域に刺激が呈示されると、実際に見えていないし、見えているという自覚もないのに、何らかの反応ができるという能力のことである。下條信輔の「サブリミナル・マインド」(中公新書)にも書いてある。

5. 正しい。

No.10 感覚情報処理や知覚の恒常性に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 3

解説： 恒常性に関する詳しい知識が必要。やや難。

1. 誤り。近刺激と遠刺激が反対である。これを入れ替えればたいだい正しい記述になる。
2. 誤り。一文目、二文目は正しい。三文目、対象の大きさも観察距離も未知である場合は、基本的に、網膜像に重きを置いて大きさを推定することになる。エムズの部屋を想起すること。
3. 正しい。
4. 誤り。一文目は正しい。二文目から三文目、正しくは、完全暗黒化において真っ黒な円盤を強いスポット光で照らすと、照明光の強度によって円盤は様々な明度で知覚される(強い照明光であれば白く見える)。このとき、そのスポット光の照射範囲内に白い紙をおくと、白く見えていた黒い円盤は黒く見えるようになり、置かれた白い紙は白く見える。これはゲルプ効果と呼ばれる。
5. 誤り。「運動の恒常性」がおかしい。通常、眼や頭、身体の動きにより網膜像は大きく変化しても、物体の位置が変化したとは感じないことを、「位置の恒常性」と呼ぶ。

No.11 次は、ハトのオペラント条件づけにおける強化スケジュールの変更に伴う反応のパターンの変化を示した図である。図中の A の間に対応する強化スケジュールとして最も妥当なのはどれか。

正答： 3

解説： 今年も出題されたサービス問題である。受講生には自明であろうから説明は省略する。A の部分がいわゆる「スキヤロップ」になっていることに気づければよい。

No.12 学習に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。(国総 H30)

正答： 1

解説： 古典的条件づけにおける基本的な現象である。

- ア. 正しい。 阻止(blocking)は、テキストなどで「ブロッキング」とそのまま表記されることもある。
- イ. 誤り。 制止(inhibition)ではなく、「隠蔽(overshadowing)」が正しい。
- ウ. 正しい。 高次条件づけとは、すでに形成された条件づけをもとに新たな条件づけを形成すること。
- エ. 誤り。 自発的回復ではなく、「脱制止(disinhibition)」が正しい。

No.13 ストレスやレジリエンス(resilience)に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 1

解説： 基本的な知識で解ける問題。やや易しい。

- ア. 正しい。レジリエンスとリスク要因やプロテクト要因は、平成 29 年度の家裁の二次の発達心理学の記述で出題されたことがある。
- イ. 正しい。ラザルスらの認知的評価モデル(ストレスモデル)とコーピングは頻出である。
- ウ. 誤り。一文目、タイプ A 行動パターンの定後は正しい。二文目が間違っている。正しくは、タイプ A 行動パターンを示す人は、ストレスを感じやすく、心臓疾患になりやすい、である。

エ. 誤り。「90%以上」というところが間違っている。ウェルナーとスミスは、不適応の危険因子(リスク要因)を、子どもの特徴(周産期ストレス、発達の遅れ、遺伝的問題等)と家庭環境(慢性的貧困、親の精神疾患、親の離婚等)の二つに分けた。これらのリスク要因を4つ以上持つ子どものおよそ3分の2(70%)が非行や精神的な問題を呈した。

No.14 パーソナリティに関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを全て挙げているのはどれか。

正答： 1

解説： パーソナリティ理論の基本知識を問うている。易しい。

ア. 正しい。ビッグ・ファイブ(特性5因子モデル)である。国家公務員試験ではいつもマクレーとコスタの5因子が出題される。

イ. 誤り。「身体の外見的特徴や生理的特徴によってパーソナリティが異なる」ことを指摘したのは、クレッチマーとシェルドンだけである。

ウ. 誤り。「1980年代にあらゆる状況で共通する行動特性が確認されたことで収束した」がおかしい。この「あらゆる状況で共通する行動特性」はそもそも存在しない。人-状況論争は現在も解決済みとは言えない。

エ. 誤り。一文目は正しい。そしてキャッテルは特性論の立場である。彼は16の根源特性は、それより上位の次元でまとめられてはいない。

No.15 幼児期から学童期にかけての社会性の定型的な発達に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 5

解説： 向社会性、自己理解の発達についての標準的な問題である。向社会性の発達について、アイゼンバーグ、セルマンの理論についての知識が必要である。また、自己概念の理解、自己意識の発達に関しては、ハーターが有名である。必ず確認をしておこう。

1. 誤り。「同輩との社会的比較」が行われるようになるのは学童期後期(8～11歳)からである。自己意識が「性格や思想などの抽象的で内面的な内容」になり始めるのは、早期青年期(13歳頃)以降である。

2. 誤り。自尊感情や自己評価が低下し始めるのは、学童期後期からであり、この頃から他者との社会的比較等を用いるようになる。

3. 誤り。「学童期後期以降頃になると」以下が間違っている。正しくは、学童期後期以降頃になると、向社会的判断は「自己反省的な共感的指向」といわれるような、役割取得や他者の人間性への配慮等に基づいて行われるようになる。「内面化された価値観や規範、義務や責任感に基づいてなされるようになる」のは、中高生の一部かそれ以上の年齢であり、小学生には見られない。

4. 誤り。ギャング・エイジに特有の徒党集団は「ギャング・グループ」と呼ばれ、親からの自立の準備として重要な意味を担う。必ずしも、反社会的な問題行動が頻発するがゆえにギャング・グループを形成させない方がよいということはない。

5. 正しい。

認知心理学

No.16 乳幼児の定型的な発達に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 4

解説： 古典的・基本的な知識を問う問題。きわめて易しい。

ア. 誤り。ヴィゴツキーによれば、言語は最初に「外言」が、後に「内言」が獲得されて、思考の手段としての言語と伝達の手段としての言語に分化していく。ピアジェによれば、「自己中心語」は社会化に伴い、急速に見られなくなる。

- イ. 正しい。母親が、断崖の深い側から子どもの好きなおもちゃを見せながら笑顔でこちらへ来るように呼べば、子どもは深い側に這ってくるという実験は、キャンパスによるものである。
- ウ. 誤り。ピアジェによれば、前操作期の幼児は、保存の法則をまだ獲得していない。
- エ. 正しい。新生児の舌出し反応は、実は、新生児が目の前に何か刺激を提示された時の一般的な反応パターンであると言われている(遠藤ほか, 2011)。

認知

No.36 次は、記憶に関する記述であるが、A～Dに当てはまるものの組合せとして最も妥当なのはどれか。ただし、解答に使用する語句は、必要に応じて最初の文字が大文字になるものとする。

正答： 1

解説： 記憶に関するごく初歩の知識が問われている。英文であるが内容は容易である。問題文をざっと訳すと以下の通り。

「数唱課題は、個人が記銘材料を長期(A)記憶に結びつけることを妨げる。そのように結びつけることが可能であれば、記憶範囲課題の遂行成績は本質的に変化しうる。この変化を説明すると、たとえば、SRUOYLLERECNISという文字列を提示されたとしよう。人の記憶範囲は 7 ± 2 なので、この14文字全ての数列を復唱することはできないだろう。しかし、もしこれらの文字の綴りが、逆順でSINCERELY YOURSとなることに気づけば、この課題は容易になるであろう。この知識を用いて、作動(B)記憶内に保たねばならない記銘材料の数を14から2(2単語)に減らすことができた。しかし、この綴りについての知識はどこから来たのか？ 長期(A)記憶、言葉についての知識が貯蔵されている場所からである。長期記憶を用いて、いわゆるチャンキング(C)をすることができる。チャンキング(C)は、数字でもできる。149-2177-20-02という一連の数字は、人の能力の限界を超えている。しかし、1492-1776-2002(D)は十分にその内に入る。長期記憶に蓄えている一連の文字や数字に再構成することによって、人はワーキングメモリーを増強することができるという一般原理がある。」

No.37 ヒューマン・エラーに関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 4

解説： ヒューマン・エラーについての基本的な問題。ヒューマン・エラーの分類、アクション・スリップの分類やその発生のメカニズムは頻出である。易しい。

ア. 誤り。「意図的に行われた不安全行為を指す違反(violation)」とは、たとえば自動車運転の際のスピード違反や高所作業時の安全帯不着用のような違反行為であり、ヒューマン・エラーには分類されない。

イ. 正しい。

ウ. 誤り。一文目は正しい。二文目、反復エラーとは、既に実行した行動を忘れ、同じ行動を再び繰り返すことであり、たとえば、歯を磨いたのに、また磨こうとしてしまうなどである。「ある行動の対象となる者が別の行動の対象となるものと入替ってしまうこと」は、混同/混合であり、たとえば、お風呂に入るためにタオルを持っていこうとして、歯ブラシを持っていこうとするなどである。

エ. 正しい。

No. 38 次は、ロディガーとマクダーモット(Roediger, H. L. III & McDermott, K. B., 1995)の実験についての記述である。この実験結果に関する説明として最も妥当なのはどれか。

正答： 1

解説： 記憶の分野を一通り勉強してきた人であれば、選択肢を吟味して解くというよりは、問題文にある実験結果の説明を読んだ瞬間に正解が出せる問題である。

1. 正しい。意味ネットワーク(活性化拡散モデル)を介して意味的に関連のある語に活性化が及んだために、再認時に、「眠り」がリストにあったと誤認したと説明される。
2. 誤り。通常、心理学で二重符号化という場合は、Paivioの二重符号化理論を指す。
3. 誤り。直接プライミングは、反復プライミングとも呼ばれ、プライムとターゲットが同じ場合のプライミング効果を指す。
4. 誤り。精緻化を行う際の、ストーリーを作ったり、イメージを付加したり、単語間にまとまりを作るような操作は意識的に行われるものである。したがって、精緻化によって「眠り」という単語の記憶が生成されたというのはおかしい。
5. 誤り。デジャヴュは、それを「初めて見た」という事実を頭で理解しつつ、「昔から知っている」と感じるという誤再認の現象である。そもそも、デジャヴュは場所や光景に関して起こるものである。

No.39 顔や表情の認識に関する記述として最も妥当なものはどれか。

正答： 3

解説： 顔や表情の認知に関して幅広く正確な知識が必要な問題である。ただし、顔の倒立効果に関する知識があれば、他の選択肢の正誤がわからなくとも、正答を正しく選べる。

1. 誤り。「海馬傍回」が誤り。正しくは、「紡錘状回」である。
2. 誤り。顔認識では、部分に分割して処理をせず、全体をまとまりとして処理をする「全体的処理」を行う傾向が強い。ゆえに、下半分を別人と入れ替えた場合、その顔から元の人物を特定するのは困難になることが多い。
3. 正しい。
4. 誤り。二文目、Ekmanの基本情動理論についての記述になっているが、Ekmanの基本情動は5つであるというのが間違い。正しくは6つ(喜び、悲しみ、怒り、恐怖、嫌悪、驚き)である。
5. 誤り。Russellのモデルが三つの次元を前提としているというのが間違い。正しくは、快-不快、覚醒度の二つの次元を前提としている。

No.40 言語処理と記憶についての実験に関する記述ア、イ、ウのうち、「言語理解における文や文章の記憶表象(心的表象)は、文の意味をベースとする命題的表象であること」を示す実験として妥当なもののみを全て挙げているのはどれか。

正答： 3

解説： 一見難しそうに見えるが、問題文を読み、選択肢の三つの実験の説明を読めば、おのずと正答が出る問題。

- ア. 正しい。ザックスの実験では、文章の意味は長く保持されるが、文章の形式や逐語的な情報などはわずかな時間しか保持されないことが示された。ちなみに、「0音節後」とは文章提示直後、「80音節後」は約27秒後、「160音節後」は約46秒後である。
- イ. 誤り。ロフタスらの目撃証言の実験は、誤誘導情報によって生じる記憶の変容を扱うものであるため、明らかに間違いとわかるであろう。
- ウ. 正しい。キンチの、文章理解についての「構築-統合モデル」の実験である。箱田らの「認知心理学」(有斐閣)に載っているため、詳しくはそちらを参照のこと。

臨床心理学

No.41 DSM-5(精神疾患の診断・統計マニュアル)における「抑うつ障害群(Depressive Disorders)や「双極性障害及び関連障害群(Bipolar and Related Disorders)」に関する記述として最も妥当なものはどれか。

正答： 4

解説： 双極性障害や抑うつに関する DSM-5 についての正しい知識が必要。やや難。

1. 誤り。DSM-5 では、「統合失調症スペクトラム障害群」、「双極性障害及び関連障害群」、「抑うつ障害群」の順に掲載されている。
2. 誤り。「6 か月」ではなく、「2 週間」が正しい。
3. 誤り。軽躁病エピソードでは、「社会的または職業的機能に著しい障害を引き起こしたり、または入院を必要とするほど重篤ではない」。
4. 正しい。
5. 誤り。双極性 I 型は、躁病エピソードを診断の中核とし、双極性 II 型は、軽躁病エピソードと抑うつエピソードの両方の存在を中核とする。双極性障害をもつ人の自殺率については、DSM-5 によれば、一般人口の少なくとも 15 倍、双極性 I 型と II 型の自殺企図の出現率はほぼ同じであるが、既遂率は、II 型障害をもつ人がより高い。

No.42 不安や恐怖に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 2

解説：

- ア. 誤り。正しくは、オルポートではなく、フロイトである。
- イ. 誤り。正しくは、潜在制止の現象に従えば、歯科医院でトラウマ的な経験を受ける前に歯科医に接したことがほとんどない子どもの方が、歯科医院でトラウマ的な経験があった場合、歯科医に対する不安や恐怖を持ちやすくなる。
- ウ. 誤り。これはホーナイ(Horney, K.)の基底不安(basic anxiety)と思われる。
- エ. 正しい。この選択肢が正解ということに異論はないが、この文章は同じ内容を繰り返しているだけであまり情報がない。

No.43 家族療法に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 4

解説： 家族療法は頻出である。基本的な概念や代表的な学派について確認しておこう。

1. 誤り。「二重拘束理論」(ダブルバインド・セオリー)を提唱したのはベイトソンである。
2. 誤り。ボーエンは、個人が家族集団から自己分化せずに、家族集団に融合していると不安を抱えるという前提に立つ。
3. 誤り。ヘイリーらの戦略派は、家族が現在悩んでいる問題を速やかかつ効果的に解決することを目的とする。そのため「人間的成長」のような長期にわたる目標設定は避ける。
4. 正しい。
5. 誤り。正しくは、(ナラティブ・セラピーにおいては)「個人が現実と思っているものは、実は社会的に構成されたものである」というとらえ方をする。また、「個人が信じているストーリーを家族間で共有して相互理解を深めた上で」も誤り。正しくは、「それまで家族を支配してきたストーリーを、代替的なストーリーに書き換えることが目指される」。

No.44 心理療法の理論と技法に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 5

解説： 基本的な知識があれば解ける。易しい。

1. 誤り。一文目、二文目は正しい。三文目、「集合的無意識」や「元型」を解釈する夢分析を重視したのは、フ

ロイトではなくユングである。

2. 誤り。セラピストの三条件のうち、特に、③の「自己一致」が間違っている。自己一致(純粋性)とは、正しくは、セラピストの経験と行動が一致していることである。
3. 誤り。本選択肢の記述は、森田療法ではなく、内観療法である。
4. 誤り。系統的脱感作は、古典的条件づけの原理(拮抗条件づけ、あるいは逆制止の原理)に基づいている。
5. 正しい。

No.45 アディクション(addiction)に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 1

解説： DSM-5の「物質関連障害および嗜癖性障害群」について正しい知識がないと、やや解きにくい。特に選択肢のイは知らない人も多いだろうし、エは勘違いしやすいところであろう。

ア. 正しい。

イ. 誤り。一文目は正しい。二文目、「耐性」ではなく、「離脱症状」が正しい。耐性とは、DSM-5によれば、正しくは、「望むような効果を得るために必要な物質の量が著明に増大するか、または通常量を摂取した際の効果が著明に減弱するかのいずれかによって示される」ことである。

ウ. 正しい。

エ. 誤り。DSM-5では、非物質関連障害群として、ギャンブル障害のみが扱われている。ただし、別途、「今後の研究のための病態」として、「インターネット障害」の診断基準案が記載されている。

教育心理学

No.51 記憶に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 5

解説： 基本的な問題。易しい。

1. 誤り。そもそも H. M. の事例では、長期記憶が等しく障害されたのではなく、手続記憶とプライミング効果は残存していた。
2. 誤り。エコイック・メモリー(聴覚的感覚記憶)は、アイコニック・メモリー(視覚的感覚記憶)よりも、持続時間が長い。
3. 誤り。グランツァーの有名な、系列位置効果に関する実験である。受講者には自明であろう。講義レジュメにもグラフを載せているので、確認しておくこと。
4. 誤り。まず、潜在記憶の定義がおかしい。正しくは、意識的な想起を伴わない記憶である。また、プライミングの手法を用いた実験から、潜在記憶の保持時間は顕在記憶よりも長いことが示されている。
5. 正しい。ただし、今日のワーキングメモリの、「エピソードバッファ」の加わったモデルも必ず確認しておくこと。

No.52 学習法や教授法に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 3

解説： 詳しい知識がなくとも、問題文を読めば常識の範囲で解けそうな問題。易しい。

1. 誤り。自己調整学習では、援助要請方略に対して否定的な見方はない。むしろ適切な援助要請ができることが必須と考える。
2. 誤り。互惠的教授法とは、他者に教える行為を通じて自分の理解が促進されるという方法であるが、ポイントは、班の成員全員に、明確な役割と責任を与えることで認知方略を向上させることである。つまり、生徒にそれぞれ質問役、要約役、明確化役、予想役というように、特定の読解方略を担当させ、質疑応答と教え合いを

通じて読解方略の向上を図る。

3. 正しい。
4. 誤り。ブルナーの発見学習では、外発的動機づけではなく、内発的動機づけを促すことが期待される。また、効率が高いとは限らず、教材の選定等、教師側の負担も大きい。
5. 誤り。本選択肢はバズ学習ではなく、アロンソンのジグゾー学習である。バズ学習とは、全体を小集団に分けて討論をさせ、再び全体集団に戻り、学習活動を行うものである。集団成員の皆が討論に参加できるようにするところがバズ学習の狙いである。
(平凡社、最新心理学事典より)

No.53 学級集団等を理解する際に用いられる理論に関する記述 A～Dのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 2

解説： 社会心理学での知識が活かせる基本的な問題。易しい。

- A. 誤り。ソシオメトリック・テストは、「成員の保護者の社会的地位」ではなく、正しくは、集団成員間の人間関係(親疎)を把握するための測定技法である。
- B. 正しい。
- C. 誤り。PM 理論の P は、Performance の P であり、目標達成機能のことである。また集団の成員の満足度が高いのは、P 機能、M 機能の双方が高いリーダーの場合である。
- D. 誤り。内集団、外集団ではなく、公式集団(formal group)、非公式集団(informal group)についての記述である。

No.54 道徳性の発達に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 3

解説： 道徳性の理論や研究に関する問題は、解きにくいものも多いが、本問は正答の選択肢がシンプルなので、正答しやすい。

1. 誤り。第一段階が間違っている。正しくは、第一段階では、規則的なものはまだ義務的なものになっていないため、「権威からの命令として認識して」はいない。
2. 誤り。ピアジェによれば、平均的には「結果論的判断」は7歳頃、「動機論的判断」は9歳頃である。
3. 正しい。
4. 誤り。「正義に関する道徳性の観点からではなく、他者への共感に基づく配慮と責任の観点から」道徳発達の過程を捉えようとしたのは、ギリガンである。
5. 誤り。道徳性は、不変的で非可逆的な発達段階を経て生じるものであるため、いきなり二つ上の段階に進んだり、一つ下に逆戻りすることはない。

No.55 達成動機や自己効力感などに関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 2

解説： 基本的な問題。易しい。

1. 誤り。このような「期待-価値理論」はアトキンソンによるものである。ただし、アトキンソンによれば、期待と価値はトレードオフの関係にあり、最も強く動機づけられるのは、期待と価値がちょうど半々のときである。
2. 正しい。講義レジュメでも紹介してある。
3. 誤り。イヌに無力感を感じさせる研究といえば、アトキンソンではなく、セリグマンである。ただし、セリグマンの学習性無力感の研究では、回避不可能な不快な事態を経験することで、無力感が学習されると考えた。

4. 誤り。選択肢の隅から隅までおかしい。まず、随伴性の認知についてパーソナリティの側面から考えたのはワイナーではなく、ロッターである。ロッターは、結果を自分の行動や努力の結果であるとする内的統制型と、結果を運やチャンスの問題だと考える外的統制型があるとした。内的統制型の方が、達成動機や自己効力や高い。
5. 誤り。ロッターではなく、ワイナーである。また、「努力」は内的かつ変動的な要因である。

No.96 自己の表出に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 2

解説： 自己に関する標準的な問題。

1. 誤り。自己呈示とは自己の印象を統制することであるが、他者からみて望ましくない印象を与えようとすることもある。それを分類したのがジョーンズとピットマンである。たとえば、他者に「威嚇」的な態度を取ることによって「この人は怖い人である」という印象を与えることができる。(それによっていじめの標的になることから逃れることができる可能性が高まる、といった報酬に結びつく)
2. 正しい。
3. 誤り。セルフ・ハンディキャッピングは、通常、自己にとって重要な課題に成功する確信が持てない場合に行われる。課題遂行前に行うことで、結果が失敗に終わっても自己高揚的に帰属させることができる。
4. 誤り。アルトマンの社会的浸透理論では、関係が進展するほど、開示内容は広く、深くなる。返報性の規範は関係構築の段階で最も強まり、安定的な信頼関係が構築された後は、返報性の規範は弱まる場合もある。
5. 誤り。一文目は正しい。二文目、正しくは、ペネペーカーらの研究では、口頭ではなく、文章に書くことによる開示が行われた。

No.97 集団に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 5

解説： 集団過程や社会的影響に関する基本的な問題である。

- ア. 誤り。ブレイン・ストーミングの原則は、①提出されたアイデアについて評価や批判をしない、②自由奔放なアイデアを尊重する、③アイデアの量を求める、④提出されたアイデアの結合と改善をする、である。
- イ. 正しい。
- ウ. 誤り。一文目は正しい。たとえば、アリは、一匹よりも他のアリがいる場合の方が長い穴を掘ることが明らかにされている(安藤・末永, 1998)。
- エ. 正しい。集団間葛藤、集団間差別の問題については、講義で扱ったとおりである。脱カテゴリー化は、ブリュワーらによる考えである。

No.98 次は、精緻化見込みモデル(elaboration likelihood model)を実証した実験に関する記述であるが、A～Dに当てはまるものの組合せとして最も妥当なのはどれか。

正答： 1

解説： 毎年のように出題されている精緻化見込みモデル(精緻化可能性モデル)の問題。英語ではあるが、モデルが理解できていれば、選択肢の語句を見ながら空欄をチェックすればそれほど苦勞せずに正答が出せる。題材に用いられている実験は、平成16年にも一度日本語で出題されている。拙著「増補改訂シケシン社会心理学編」51頁参照のこと。以下、問題文を該当箇所だけざっと訳しておく。

- ・ 四種類のかみそりの広告が作られた。二つは、有名で人気のあるスポーツ選手の写りが使われ、もう二つは、カリフォルニア出身と書かれた中年の市民が使われた。商品の保証書によって「周辺の手がかり」(A)の操

作がなされた。最後に、二つの広告では、商品について6つの説得的な文言を載せ、もう二つの広告では6つの見せかけだけのあいまいな文言を載せた。」

・ 「関与度×メッセージの質」の交互作用によって明らかになったのは、広告における論拠が、関与度の「低い(C)」群よりも「高い(B)」群にとって、商品態度へのより重要な決定要因となった ことである。しかし、「関与度×保証書」の交互作用によって明らかになったのは、商品のステータスを表す保証書は、関与度の「高い(B)」群よりも「低い(C)」群にとって、商品態度へのより重要な決定要因になった ことである。このように、論拠を処理する動機づけが減れば、「周辺手がかりは(D)」相対的により重要な説得の決定因と「なる(D)」。 反対に、論拠に対する吟味が強まれば、「周辺手がかりは(D)」相対的にあまり重要ではなく「なる(D)」。

No.99 比較による自己の評価に関する記述ア～エのうち、妥当なもののみを挙げているのはどれか。

正答： 2

解説： 易しい。

ア. 誤り。「自己が確立する青年期に最も少なくなる」が間違い。この時期はむしろ社会的比較が活発になる。

イ. 誤り。セルフ・ディスレパンシー理論における現実自己、理想自己、義務自己の中には、自分の視点と他者からの視点の双方が入っている。

ウ. 正しい。シャクターの親和欲求の実験として知られるが、この結果は、実験参加者が単に他者と一緒にいることで不安を紛らわそうとしたと解釈されるのではなく、自分と類似した他者(自分と同じ状況に置かれた他者)と一緒にいて、その他者と自分を比較することで自分の感情状態を評価しようとしたと解釈される。

エ. 誤り。栄光浴は、通常、自己関連性の低い課題において生じる。

No.100 対人認知に関する記述として最も妥当なのはどれか。

正答： 4

解説： 対人認知についての標準的な問題。

1. 誤り。講義でも扱った、ヒギンズの、例の「ドナルド」の対人認知のプライミング効果の実験である。正しい手続きを再確認のこと。

2. 誤り。連続体モデルでは、最後までカテゴリーに当てはめ続けるのではなく、再カテゴリー化に失敗すれば、カテゴリーベースから個人ベースの分析に入っていく。カテゴリーベースの処理と個人ベースの処理が連続的であるところが要点である。

3. 誤り。マクリーらの、ステレオタイプ抑制のリバウンド効果の実験である。第一課題でステレオタイプの抑制を教示された群は、次の、抑制の教示のない第二課題において、統制群と比較して有意にステレオタイプ的な記述をした。

4. 正しい。

5. 誤り。ギルバートらの3段階モデルにおいて、最も認知資源が求められるのは、第3段階の「状況要因を加味して推論を修正する段階である。

以上。